

Bauddhakośa

Newsletter

No.4

目次

活動報告	1
国際ワークショップ Candrakīrti vs. Bhāviveka	1
バウッタコーシャ・プロジェクト第二回シンポジウム	2
研究ノート	3
中観派における術語の定義的用例と現代語訳の検討（横山 剛）	3
caḅsurvijñāna, caḅsus, rūpa の用例と訳例（高務祐輝）	10
記事	19

活動報告

国際ワークショップ

Candrakīrti vs. Bhāviveka

2015 年 8 月 26 日（水）から 28 日（金）の三日間、「バウッタコーシャ・プロジェクト」（代表：齋藤明）および、『入中論』校訂プロジェクト」（代表：Anne MacDonald）、「中観派ワークショップ」（代表：赤羽律）の三つのプロジェクトの共催により、International Workshop on Candrakīrti vs. Bhāviveka が、東京大学山上会館（地下会議室 001 および 201・202 会議室）において開催されました。国内外から、若手を含めた 17 名の研究者により発表がなされ、充実したワークショップとなりました。発表者と題目は以下のとおりです。なお、今回の発表をもとに論文集を刊行する予定です。

8 月 26 日（水）

叶少勇（北京大学准教授）：Dependent Origination in Nāgārjuna's Context

齋藤明（東京大学教授）：Candrakīrti vs. Bhāviveka on the Logic of MMK 1.1: Negation of Arising in the Four Possible Ways

Cristina Scherrer-Schaub（EPHE 名誉教授）：The Quintessence of the Madhyamaka Teaching Blossoms Again: Some considerations in view of the Vth-VIIth c.A.D.

桂紹隆（広島大学名誉教授）：Kumārajīva, Bhāviveka and Candrakīrti on “Seeing without seeing”

M. David Eckel（ボストン大学教授）：Bhāviveka's on the Terms Naya and Nīti: Style and Substance in a Buddhist Philosophical System

何敏敏(浙江大学教授): Bhāviveka vs. Candrānanda
 吉水清孝(東北大学教授): Some Remarks on the
 Buddha and Buddhism in the Works of Kumāriḷa,
 Bhāviveka and Candrakīrti

8月27日(木)

田村昌己(広島大学大学院): Bhāviveka on the
 Truth, the Buddha's Words, and Inference
 米澤嘉康(大正大学講師): Svatantrānumāna in
 the *Prasannapadā*
 Karen Lang(ヴァージニア大学名誉教授): Candra-
 kīrti's Use of Scripture (*āgama*) and Reasoning
 (*yukti*) in Explaining the Teaching of Emptiness
 吉水千鶴子(筑波大学教授): *prasaṅga* and *Prāsaṅgika*
 Anne MacDonald(オーストリア学術アカデミー研究員):
 A Rule Made to be Broken: Responses to Dig-
 nāga's Call for Mutual Establishment(*ubhaya-*
siddha)
 新作慶明(武蔵野大学助教): One Aspect of *Pra-*
pañca in the *Prasannapadā* and *Prajñāpradīpa/-*
tīkā: Based on the Examples in Chapter 18
 横山剛(京都大学大学院): Abhidharma Categories
 in the *Madhyamakapañcaskandhaka*: An Anal-
 ysis of Their Function and Their Madhyamaka
 Character

8月28日(金)

西山亮(龍谷大学非常勤講師): Candrakīrti vs.
 Avalokītavratā?
 早島慧(龍谷大学非常勤講師): A Study of the
 Concept of "*Paramārtha*" from the Perspective
 of the Compound Analysis



Candrakīrti vs. Bhāviveka 初日

パウツダコーシャ・プロジェクト第二回シンポジウム

平成26年11月15日(土)13時より、「仏教用語の今昔(いまむかし)ー翻訳はいかにして可能かー」と題して、東京大学仏教青年会(ホールAB)において、パウツダコーシャ・プロジェクト第二回シンポジウムが開催されました。研究発表の内容は以下のとおりです。

第一部(研究発表)

高務祐輝(京都大学大学院)

「『瑜伽師地論』における認識(vijñāna)のプロセスー前五識と意識ー」

堀内俊郎(東洋大学国際哲学研究センター研究助手)

「『釈軌論』第二章における世親による阿含の経句の語義解釈」

石田尚敬(東京大学特任研究員)

「瞑想者(yogin)の知覚」

第二部(特別シンポジウム「*prajñā/ paññā*の訳語をめぐって」)

中村隆海(東北大学大学院出身・寺院住職):

ヴェーダ文献の *prajñā*

河崎 豊(大谷大学真宗総合研究所特別研究員):

パーリ文献の *paññā*

一色大悟(東京大学特任研究員):

説一切有部の *prajñā*

高橋晃一(東京大学特任研究員):

瑜伽行派文献の *prajñā*

横山 剛(京都大学大学院博士課程):

中観派文献の *prajñā*

菊谷竜太(東北大学特任研究員):

密教文献の *prajñā*

渡辺章悟(東洋大学教授):

般若経の *prajñā*

斎藤 明(東京大学教授): 総括

なお、第二部特別シンポジウム「*prajñā/ paññā*の訳語をめぐって」は、論文集を近日刊行する予定です。

研究ノート

中観派における術語の定義的用例と現代語訳の検討

— 『中観五蘊論』に基づく研究成果の公開に向けて —

横山 剛

(京都大学大学院・京都光華女子大学真宗文化研究所研究員)

1 『中観五蘊論』に基づく研究

バウッダコーシャ・プロジェクトにおいて、京都大学の宮崎研究班は、中観派の文献を対象として術語の定義的用例の回収とその現代語訳の検討を進めてきた。バウッダコーシャ・プロジェクトチーム [2014]、同 [2015] の中観派の章で指摘したように、以上の作業を進めるにあたっては、中観派の教説そのものに由来する難しさがある。重要な教理概念を体系化し、その定義を明確に規定するという行為はそれ自体がアビダルマ的な営みに他ならない。中観派はそのような点に主眼を置かず、先行する他学派の既存の術語を使用し、その教説を踏襲、或いは批判することで、自学派の教説を成立させる。したがって、一般に、術語の現代語訳の参考となるような定義的用例を中観派の文献から回収すること

は難しく、説一切有部の「七十五法」や瑜伽行派の「百法」のような組織立った定義の解説は期待できない。このような状況を背景に、宮崎研究班では、月称 (Candrakīrti, ca. 600—650¹) の『中観五蘊論』 (*Madhyamakapañcaskandhaka*², 蔵訳でのみ現存) に注目し、検討を進めている³。同論は、中観派の視点から有部の範疇論を解説する特異な中観論書であり⁴、その解説によれば、有部の範疇論を構成する諸法に関しては、現代語訳の検討に資する定義的用例を体系的に回収することが可能である⁵。

2 術語の分析方針

次に『中観五蘊論』の範疇論を構成する諸法の中から upakleśa (随煩惱) の一番目の要素である māyā (誑) を例に、術語の分析方針を示したい。

¹ 月称の年代に関して、LINDTNER [1979] (pp. 90—91) や岸根 [2001] (pp. 26—34) 等の研究は、これまで一般的に想定されていた年代よりも早い 530—600 頃とする。同論師の年代論は本研究の主題ではなく、本研究の内容が新たな資料や根拠を提供するわけでもないため、ここでは従来の説を提示し、異なる見解があることを指摘するにとどめる。

² 『中観五蘊論』の書名に関しては、拙稿 [2015] を参照。

³ 池田 [1985]、岸根 [2001] (pp. 18—19, 39—41) は『中観五蘊論』全体を月称の作とすることに疑問を呈し、中観派的な色彩が特に顕著な prajñā (慧) の解説のみが月称に帰される可能性を指摘する。著者に関する問題は同論に関する最も重要な問題の一つであり、稿を改めて論じることを予定している。一方で、同論が後代において中観派の論書として認識されていたことは確実である。したがって、当面は同論の内容を月称の思想と結びつけて論じることは避け、同論を有部のアビダルマ範疇論に対する中観派における理解の一例として扱うものとする。

⁴ 書誌情報や先行研究などの『中観五蘊論』に関する基本的な情報に関しては、『梵語仏典の研究 III 論書篇』(平楽寺書店, 1990) の pp. 244—245 を参照。また、同論をめぐる主要な問題に関しては、バウッダコーシャ・プロジェクトチーム [2014] (pp. 37—38) の脚注 45—47 を参照されたい。

⁵ 『中観五蘊論』における範疇論の体系とその構成要素に関しては、バウッダコーシャ・プロジェクトチーム [2014] (pp. 38—39) の脚注 48 を参照。ただし、同研究を発表した後に、本稿後半で紹介する『牟尼意趣莊嚴』の研究により、『中観五蘊論』の範疇論を構成する諸法の原語が明確となり、訂正を必要とする箇所があることが判明した。紙幅の都合上、本研究ではそれらの訂正点を省略するが、別稿において提示することを予定している。

『中観五蘊論』における七十五法対応語の定義的用例集（見本）

māyā

【七十五法】斎藤他 [2011] pp. 131–132 【百法】斎藤他 [2014] pp. 121–123 【パーリ文献】
榎本他 [2014] pp. 170–173

Madhyamakapañcaskandhaka

【訳例】欺瞞、惑わすこと

【蔵訳】sgyu

【定義的用例】

〔和訳〕

「欺瞞」とは、他者を欺くことである。幻影が自らの本性を覆い隠し、偽ったあり方を自体として現われて、世間の人を欺く様に、その心所法と結びつくことで、自身のあるがままの性質を覆い隠し、虚妄なる自体として現われて、他者を欺く法、それが「欺瞞」といわれる。

〔蔵訳〕

sgyu ni g'zan bslu¹⁾ ba ste / ji ltar sgyu ni rañ gi ño bo sbas nas brdzun pa'i rnam pa'i bdag ñid du zugs te 'jig rten slu²⁾ bar byed pa de b'zin du sems las byuñ ba'i chos gañ dañ³⁾ ldan pas rañ la ji ltar gnas pa'i chos sbas nas mi bden pa'i bdag ñid du zugs te / g'zan la bslu⁴⁾ ba'i chos de ni sgyu⁵⁾ zes brjod do //

1) *slu* CD 2) *bslu* GNP 3) G inserts /. 4) *slu* CD 5) *rgyu* GNP (C 258b3–4, D 261b7–262a1, G 358b2–4, N 289a7–b2, P 300a6–7, cf. LINDTNER [1979] p. 135, ll. 17–21)

関連文献（1）

Munimatālamkāra

【梵語】māyā

【蔵訳】sgyu

【定義的用例】

〔梵文〕

māyā paravañcanā / yayā vyāmohayati yataḥ pare 'bhiprāyaṃ na jānanti māyeva hi svarūpaṃ pracchādya vitathenātmanā pravartamānaṃ cittaṃ parān viśaṃvādayati yaddharmayogāt sā māyā //

（李・加納 [2015] p. 29, ll. 11–13）

〔蔵訳〕

sgyu¹⁾ ni g'zan bslu²⁾ ba ste / gañ gis rnam par rmoñs par byed pa'am gañ las g'zan rnam kyi bsaṃ pa mi śes par 'gyur la / sgyu ma b'zin du rañ gi ño bo sbas nas sems ji b'zin ma yin pa'i bdag ñid du 'jug³⁾ ste / chos gañ dañ ldan pa las pha rol rnam slu⁴⁾ bar byed pa de sgyu'o⁵⁾ //

1) *rgyu* GNP 2) *slu* CD 3) GNP insert *pa.* 4) *bslu* GNP 5) *rgyu'o* GNP (C 133a5–6, D 133b3–4, G 210b2–4, N 154a5–7, P 159b3–4, cf. 磯田 [1991] p. 6, ll. 14–18)

関連文献 (2)

Abhidharmāvatāra

【蔵訳】 sgyu

【漢訳】 誑

【英訳】 deceptiveness

【仏訳】 tromperie

【定義的用例】

【蔵訳】

sgyu¹⁾ ni pha rol la bslu²⁾ ba'o //

¹⁾ *rgyu* GNP ²⁾ *slu* CD (C 312a4, D 311a3, G 504a1, N 414a4, P 403a8, cf. DHAMMAJOTI [2008] p. 232, l. 27)

【漢訳】

誑謂惑他。

(T 28, 984a22)

【蔵訳からの和訳例】

誑は他〔人〕を惑わすことである。

(櫻部 [1997] p. 214)

【漢訳からの英訳例】

Deceptiveness (*māyā*) is the deluding of others (*paravañcana*).

(DHAMMAJOTI [2008] p. 95)

【漢訳からの仏訳例】

La tromperie consiste à mentir aux autres (*paravañcanā māyā*).

(VELTHEM [1977] p. 33)

このように各術語の分析は『中観五蘊論』における定義的用例を基盤とし、それを『牟尼意趣莊嚴』(*Munimatālaṃkāra*)と『入阿毘達磨論』(*Abhidharmāvatāra*)からの情報で補うという形式で進める。『中観五蘊論』における定義的用例を分析し、現代語訳を検討するに際して、『牟尼意趣莊嚴』と『入阿毘達磨論』の二論書は特に有益な情報を提供する。以下にこの二論書と『中観五蘊論』の関係について解説し、本研究において二論書を用いることの意義を解説する。

『牟尼意趣莊嚴』を用いることの意義

『牟尼意趣莊嚴』(*Munimatālaṃkāra*)はインド仏教最後期の学匠であるアバヤーカラグプタ(Abhayākaragupta, 11–12c, 1125 没)の顕教分野の主著である。同論において、アバヤーカラグプタは、先行する論書の教説を引用、或いは借用し、纏めることで、インド仏教の顕教思想を総合的に解説する。これまで蔵訳に基づく研究が磯田熙文氏により進められてきたが、最近、梵文原典の研究が李学竹氏と加

納和雄氏により開始され、同論における経論からの引用や借用を通じて、原典が失われた文献の原文を回収することができるという点で注目を集める。範疇論の解説に関しても例外ではなく、拙稿 [2014c] で指摘した通り、『牟尼意趣莊嚴』の第一章における範疇論の解説は『中観五蘊論』に基づくものであり、蔵訳でのみ現存する『中観五蘊論』の原文を『牟尼意趣莊嚴』から一定の割合で回収することができる⁶。このように失われた原文を部分的に提供するという点で『牟尼意趣莊嚴』は『中観五蘊論』の定義的用例を分析する際に貴重な情報源となる⁷。

『入阿毘達磨論』を用いることの意義

『入阿毘達磨論』(Abhidharmāvatāra) は有部の論師である塞建陀羅 (*Skandhila, ca. 5c) の作であり、範疇論を中心に有部の教理を簡潔に纏め上げた小論である。同論は世親 (Vasubandhu, ca. 400–480) の『阿毘達磨俱舍論』(Abhidharmakośabhāṣya) と同時代の成立であることが予想され、インドはもとより、中国やチベットなどの後代の伝播地においても有部アビダルマの優れた撮要書として重視された形跡が確認される⁸。瓜生津 [1965] は『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の範疇論の構成要素が心所法を中心に強い一致を示すことを指摘し (p. 64)、池田 [1985] は両論の範疇論を対照して、その一致を示す (pp. 31–40)。そして両研究は『入阿毘達磨論』系統のアビダルマが『中観五蘊論』の成立に影響を与えている可能性を指摘する。これらの研究が指摘する通り、『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の範疇論は、nirvid (厭) や prāmodya (欣) などの特殊な心所法や saṃyojana (結) などの煩惱法における下位

分類に至るまで強い一致を見せ、言い換えるならば、『中観五蘊論』の範疇論を構成する要素に関しては、同一の要素を『入阿毘達磨論』に見出すことが出来る。以上の関係は、『牟尼意趣莊嚴』の場合と同様に、『中観五蘊論』における情報の不足を補うという点で重要である。既に述べたように『中観五蘊論』は蔵訳でのみ現存し、漢訳は存在しない。また、現時点では現代語訳も存在しない。一方、『入阿毘達磨論』には玄奘による漢訳が存在し、櫻部建氏による和訳、Dhammajoti 氏による英訳、そして Van Velthem 氏による仏訳が存在する。したがって『中観五蘊論』に関する資料からだけでは得られない漢訳語と現代語の訳例を『入阿毘達磨論』を通じて得ることが出来る。

以上のように『牟尼意趣莊嚴』と『入阿毘達磨論』の二論書は、『中観五蘊論』における定義的用例と術語の現代語訳を検討するに際して、貴重な情報を提供する。しかし、その一方で、術語の分析に際して、二論書の情報に過度に依拠することは避けなければならない。特に『入阿毘達磨論』に関しては、範疇論の構成要素が一致する点では問題ないが、各法の解説の細部に関しては相違する点も見られ、『入阿毘達磨論』から回収される漢訳語と現代語訳に関してはあくまでも参考情報とすべきである。このように研究の中心が『中観五蘊論』であり、それを『牟尼意趣莊嚴』と『入阿毘達磨論』からの参考情報で補うという基本形式を十分に意識した上で、各術語の分析を進めたい。

⁶ 『中観五蘊論』の研究を進めるに際して、李・加納両氏のご厚意により、『牟尼意趣莊嚴』における範疇論解説の読解を優先的に進めて頂いた。この場にて厚く御礼申し上げたい。また『牟尼意趣莊嚴』の範疇論解説の和訳に関しては、李・加納両氏に筆者を加えた共同研究として 2015 年度中の刊行を予定している。

⁷ 『牟尼意趣莊嚴』の蔵訳五版のなかで、金写版、ナルタン版、北京版の三版には、割注が挿入され、本文に対して注釈を加えたり、出典を示すなど、同論の解説を理解するために有益な情報を数多く含む。一方で、本研究の趣旨は『中観五蘊論』における定義的用例の分析と、それに基づく現代語訳の検討にあり、原文の回収を中心にあくまで参考資料として『牟尼意趣莊嚴』を用いる。したがって、上述の割注を省略するものとする。同論の蔵訳に関して、筆者は、赤羽律氏と共に、五版に基づく割注入りの批判校訂本を製作し、前半部分を AKAHANE and YOKOYAMA [2014] として発表した。後半部分に関しても、現在、共同研究を進めており、その成果は『インド学チベット学研究』19 に投稿予定である。

⁸ 『入阿毘達磨論』、並びにその作者に関する基本的な情報は、拙稿 [2013] pp. 1–3 を参照。また同論と『俱舍論』の先後関係に関しては、拙稿 [2013]、同 [2014a] を、『品類足論』(Prakaraṇapāda) との関連に関しては、拙稿 [2014b] を参照されたい。

3 研究成果の公開に向けて

現在、宮崎研究班では、第一段階目の研究成果として、『中観五蘊論』の範疇論を構成する諸法の中から、七十五法に含まれる法を抜き出して、その成果を優先的に公開することを計画している。本来は『中観五蘊論』における範疇論体系を活かして、全ての法に関する成果を公開するのが理想的であるが、全ての法の分析を完了するためにはなお時間が必要であり、特に nirvid (厭) や煩惱法の最も下位の分類で解説される atimāna (過慢) や satkāyadr̥ṣṭi (有身見) などの七十五法に含まれない諸法に関しては更なる検討が求められる。このような理由から、斎藤

他 [2011] をはじめとするバウツダコーシャ・プロジェクトにおける既刊の三研究を参考にしつつ、七十五法に含まれる諸法に関する研究成果を先行して公開する。『中観五蘊論』全体の成果の公開に関しては、第二段階目の目標とし、今後、全ての法の分析が完了した時点で発表したい。さらに、宮崎研究班では、今後の展望として、以上の『中観五蘊論』における研究成果を念頭に置いて、月称の他の論書や龍樹などの中観派論師の諸著作におけるアビダルマ範疇論に関連する術語の使用状況を調査し、『中観五蘊論』の定義が適用可能であるか、或いはそれとの差異を分析することを視野に入れている。

<略号>

- C Co ne edition of the Tibetan Tripiṭaka
- D sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka
- G dGa' ldan edition of the Tibetan Tripiṭaka
- N sNar thañ edition of the Tibetan Tripiṭaka
- P Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka
- T Taishō shinshū daizōkyō 大正新脩大蔵経

<一次文献>

Abhidharmāvatāra of *Skandhila (ca. 5c)

(Tib.) C *ñu* 303a5—324a7, D 4098 *ñu* 302a7—323a7, G 3598 *thu* 490a—522a6, N 3590 *thu* 403b—429, P 5599 *thu* 393a3—417a8.

(Chin.) T 28, 1554, 980b20—989a19, translated by Xuanzang 玄奘.

Madhyamakapañcaskandhaka of Candrakīrti (ca. 600—650)

(Tib.) C *ya* 236a7—263a7, D 3866 *ya* 239b1—266b7, G 3266 *ya* 326a—365b3, N 3258 *ya* 264a6—295a3, P 5267 *ya* 273b6—305b5.

Munimatālaṅkāra of Abhayākara Gupta (11—12c, d. 1125)

(Skt.) 李・加納 [2015]

(Tib.) C *a* 73a2—291b4, D 3903 *a* 73b1—293a7, G 3298 *ha* 66b2—415a5, N 3290 *ha* 66b2—415a5, P 5299 *ha* 71b3—398b3.

<二次文献>

AKAHANE, Ritsu and YOKOYAMA Takeshi 赤羽律・横山剛

- [2014] The Sarvadharmā Section of the *Munimatālaṅkāra*, Critical Tibetan Text, Part I: with Special Reference to Candrakīrti's *Madhyamakapañcaskandhaka* 『インド学チベット学研究』18, pp. 14—49.
- BAUDDHAKOŚA PROJECT TEAM バウツダコーシャ・プロジェクトチーム
- [2014] 「śraddhā/saddhā の訳語をめぐって」『仏教文化研究論集』17, pp. 3—64.
- [2015] 「prajñā/paññā の訳語をめぐって」『仏教文化研究論集』18, 近刊.
- DHAMMAJOTI, Kuala Lumpur 法光
- [2008] *Entrance into the Supreme Doctrine, Skandhila's Abhidharmāvatāra*, The University of Hong Kong, 2nd ed., Hong Kong (1st ed., Colombo, 1998).
- ENOMOTO, Fumio et al. 榎本文雄 他
- 『ブツダコーシャの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—バウツダコーシャ III』インド学仏教学叢書 17, 山喜房佛書林, 東京.
- IKEDA, Rentaro 池田練太郎
- [1985] 「Candrakīrti 『五蘊論』における諸問題」『駒澤大學佛學部論集』16, pp. 23—45.
- KISHINE, Toshiyuki 岸根敏幸
- [2001] 『チャンドラキールティの中観思想』大東出版社, 東京.
- LI Xuezhū and KANO, Kazuo 李学竹・加納和雄
- [2015] 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』第一章 (fol. 48r4—58r5) — 『中観五蘊論』にもとづく一切法の解説—」『密教文化』234, pp. 7—44.
- LINDTNER, Christian
- [1979] Candrakīrti's *Pañcaskandhaprakaraṇa*, I. Tibetan Text, *Acta Orientalia* XL, pp. 87—145.
- SAITO, Akira et al. 斎藤明 他
- [2011] 『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集—仏教用語の用例集 (バウツダコーシャ) および現代基準訳語集 1—』インド学仏教学叢書 14, 山喜房佛書林, 東京.
- [2014] 『瑜伽行派の五位百法—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—バウツダコーシャ II』インド学仏教学叢書 16, 山喜房佛書林, 東京.
- SAKURABE, Hajime 櫻部建
- [1997] 「附篇『入阿毘達磨論』(チベット文よりの和訳)」『増補版 佛教語の研究』文栄堂書店, 京都.
- URYUZU, Ryushin 瓜生津隆真
- [1965] 「中観仏教におけるボサツ道の展開—チャンドラキールティの中観学説への一視点」『鈴木学術財団年報』1, pp. 63—77.
- VAN VELTHEM, Marcel
- [1977] *Le Traité de la Descente dans la Profonde Loi (Abhidharmāvatārasāstra) de l'Arhat Skandhila*, Publications de l'Institut Orientaliste de Louvain 16, Université Catholique de Louvain, Institute Orientaliste, Louvain-la-neuve.
- YOKOYAMA, Takeshi 横山剛
- [2013] 「塞建陀羅造『入阿毘達磨論』成立考—『俱舍論』との先後関係をめぐって—」『佛史學研究』56-1, pp. 1—21.

-
- [2014a] The Chronological Order of the *Abhidharmāvatāra* and the *Abhidharmakośabhāṣya*: Reexamining the Evidence in Puguang's *Jushelun ji*, 『印度學佛教學研究』 62-3, pp. 148–152.
- [2014b] 「『入阿毘達磨論』の原題に関する考察—蔵訳仏典が伝える書名中の“rab tu byed pa” (prakaraṇa) の意味をめぐって—」 『日本西藏學會々報』 60, pp. 1–14.
- [2014c] 「『牟尼意趣莊嚴』 (*Munimatālamkāra*) における一切法の解説—月称造『中觀五蘊論』との関連をめぐって—」 『密教文化』 233, pp. 21–47.
- [2015] A Reconstruction of the Sanskrit Title of Candrakīrti's *Phuṅ po lia'i rab tu byed pa*: with Special Attention to the Term “rab tu byed pa” 『印度學佛教學研究』 63-3, pp. 208–212.

cakṣurvijñāna, cakṣus, rūpa の用例と訳例

— 『瑜伽師地論』 「本地分」 に基づく定義的用例集作成に向けて —

高務祐輝

(京都大学大学院)

1 はじめに

本報告は、平成 25 年度から室寺研究班（研究分担者：室寺義仁 滋賀医科大学教授、研究協力者：岡田英作、高務祐輝）において遂行している共同研究（研究分担課題：「初期瑜伽行派関連用語」）での成果の一部である。本班では、仏教用語に関する初期瑜伽行派の定義的用例をめぐり、同派の根本典籍である『瑜伽師地論』（*Yogācārabhūmi*）の中、古層とされる「本地分」を対象に調査を進めている。現在、回収ならびに検討を行っている用例は以下の 2 つに大別される。

- ① 瑜伽行派の五位百法の一部について、第一「五識身相応地」と第二「意地」に見られるもの。
- ② *avidyā*（無明）から *jarāmaraṇa*（老死）に至る十二支縁起の各支分について、第三～五「有尋有伺等三地」の支分解説（*vibhaṅga*）に見られるもの。

この中で、本稿では①の五位百法に関連する用例について報告したい。

五位百法に関する『瑜伽師地論』の定義的用例については、斎藤研究班により昨年公刊された研究成果『瑜伽行派の五位百法』において、参考情報として原文を挙げている（斎藤他 [2014] における「その他の瑜伽行派文献」欄参照）。この成果は、百法の定義的用例が網羅的に回収可能な、アサンガ作『大乘阿毘達磨集論』（*Abhidharmasamuccaya*）とヴァスバンドウ作『大乘五蘊論』（*Pañcaskandhaka*）の用例を中心に構成されている。両論書とも、瑜伽行派を代表する論師が同派の立場からアビダルマについて

著した重要な文献であり、百法に関する同派の定義的用例および現代基準訳語を扱う上で、まず掘り所となるべきものである。一方で、『瑜伽師地論』から回収される用例は、情報量としては限定的だが、それらの中で最も古く、起点となる用例であるという点でやはり重要である。ただし、そうした『瑜伽師地論』のサンスクリット原文に関して、底本となる既刊校訂本（Bhattacharya[1957]、略号 YBh）自体に誤植を含む誤りや問題点が散見されることが従来指摘されている。

以上のような状況を踏まえて『瑜伽師地論』の用例に関する重要性と問題点を考慮した結果、本班の活動においてこうした文献学上の難点を解消し、さらに、いくつかの情報を新たに補足、整備しておくことにも一定の意義はあるであろうと考え、改めてそれらの用例について取り上げることにした。

作業を進める上で留意している点は凡そ次の通りである。まず、既刊校訂テキストに関する問題に対し、現存する単一サンスクリット写本、チベット語訳、漢訳、その他の情報を参照して作成した再校訂テキストを使用している。ただし煩を避けるため、注記は従来テキストへの訂正に限り明示する。それに伴い、文章および複合語の区切り方に関しても班としての読み方を提示するように心掛けた。また、新たに補足、整備する情報として、本班で検討した定義的用例の和訳を提示し、デルゲ版と北京版を校合したチベット語訳、大正新脩大蔵経の漢訳を併記している。原文の引用に関しても、当該箇所における文脈に沿った形で提示できるように引用範囲に配慮した。各研究班により既に公刊された成果との相互参照を容易にするため、斎藤他 [2011][2014] および

榎本他 [2014] における対応語の頁を併記している。以上の点に留意しつつ、『瑜伽行派の五位百法』に対するいわゆる補遺版の作成を目指し、現在検討を重ねている。

2 cakṣurvijñāna, cakṣus, rūpa の定義的用例

次に、成果のサンプルとして、cakṣurvijñāna と cakṣus と rūpa の定義的用例を提示してみたい。「五識身相応地」(*Pañcavijñānakāyaśaṃprayuktā bhūmiḥ*) と「意地」(*Manobhūmi*) では、pañcavijñānakāya と manovijñāna に関する五相 (pañcākāra、すなわち、svabhāva、āśraya、ālambana、sahāya、karman) の枠組みに基づき各項目が解説される。例えば cakṣurvijñāna に関しては、svabhāva としての cakṣurvijñāna と、āśraya としての cakṣus、manas、ālayavijñāna と、ālambana

としての rūpa と、sahāya としての caitasadharmā と、そして karman は自らの対象 (svaviṣaya) を認識対象 (ālambana) とする識別であること云々、といったように各項目を解説する。用例はこの構成に沿った形で抽出している。

体裁に関しては、斎藤研究班による『瑜伽行派の五位百法』を参考にしており、先行の成果における対応頁は見出し語の下に挙げている。また、見出し語に対する現代基準訳語例 (【訳例】の日本語訳と英語訳) は、基本的には『瑜伽行派の五位百法』によるものを踏襲している。ただし、一部の現代基準訳語例、および定義的用例の和訳に関して使用する訳語が必ずしもこれに従っていない場合もある。この点について、今後とも継続して『瑜伽師地論』における仏教用語を吟味分析し、現代日本語としてより理解し易い訳語を考えて行くために本班から提起する試訳であり、識者からのご叱正を乞うものである。

『瑜伽師地論』「本地分」に基づく「五位百法」関連用語の定義的用例集 (見本)

cakṣurvijñāna

Cf. 【百法】斎藤他 [2014]pp. 2-3.

Pañcavijñānakāyaśaṃprayuktā bhūmiḥ

【訳例】【日】眼による認識、視覚 【英】visual consciousness

【漢訳】眼識

【チベット語訳】mig gi rnam par śes pa

【定義的用例】

【和訳】

眼による認識とは何か。眼を拠り所とする、いろかたちの識別である。

【原文】

cakṣurvijñānaṃ katamat. yā cakṣur-āśrayā rūpa-prativijñaptiḥ. (YBh 4.5)

【漢訳】

云何眼識自性。謂依眼了別色。 (T 279a23—24)

【チベット語訳】

mig gi rnam par śes pa gan' ŷe na | gan' mig la brten nas gzugs so sor rnam par rig pa'o || (D 2a4, P 2b4)

cakṣus

Cf. 【七十五法】 斎藤他 [2011]pp. 1—4; 【百法】 斎藤他 [2014]pp. 184—186; 【パーリ文献】 榎本他 [2014]pp. 1—12.

Pañcaviññānakāyasaṃprayuktā bhūmiḥ

【訳例】 [日] 眼, 視覚機能 [英] eye, visual faculty

【漢訳】 眼

【チベット語訳】 mig

【定義的用例】

〔和訳〕

眼による認識の拠り所とは何か。眼が「同時に存在する拠り所」であり、マナスが「直前〔の一瞬間〕の拠り所」であり、全ての種子を有し、拠り所〔たる身体〕を取るものであり、異熟によって包摂されるアーラヤ識が「種子の拠り所」である。そのようなこれらをまとめると、拠り所は2種であり、〔すなわち〕物質的なものと、非物質的なものである。それらの中で、眼が物質的なものであり、それ以外が非物質的なものである。

眼とは何か。四元素を原因とする、眼による認識の拠り所である透明なものであって、指し示すことができず抵触する。マナスとは何か。眼の認識にとって直前に過ぎ去った〔一瞬間の〕認識である。全ての種子を有する認識とは何か。過去の、戯論を喜ぶという原因によって、全ての種子を有する異熟が発現し終わったものである。

〔原文〕

cakṣurviññānasyāśrayaḥ katamaḥ. cakṣuḥ sahabhūr āśrayaḥ, manaḥ samanantara āśrayaḥ, sarvabījakam āśrayôpādātṛ vipāka-saṃgr̥hītam ālayaviññānam bijāśrayaḥ. tad etad abhisamasya dvididha āśrayo bhavati, rūpī cārūpī ca. tatra cakṣū rūpī, tadanyo 'rūpī.

cakṣuḥ katamat. yaś¹⁾ catvāri mahābhūtāny upādāya cakṣurviññānasaṃniśrayo rūpapasādaḥ, anidarśanam sapratigham.²⁾ manaḥ katamat. yac cakṣurviññānasyānantarātītam viññānam. sarvabījakaṃ viññānam katamat. pūrvakaṃ prapañca-rati-hetum upādāya yaḥ sarvabījako vipāko nirvṛttaḥ. (YBh 4.6—12)

1) yaś em.: om. Ms YBh 2) anidarśanam sapratigham Ms : anidarśanaḥ sapratighaḥ YBh

〔漢訳〕

彼所依者俱有依謂眼。等無間依謂意。種子依謂即此一切種子執受所依異熟所攝阿頼耶識。如是略説二種所依。謂色非色。眼是色餘非色。

眼謂四大種所造眼識所依淨色無見有對。意謂眼識無間過去識。一切種子識謂無始時來樂著戲論熏習爲因所生一切種子異熟識。 (T 279a24—b3)

〔チベット語訳〕

mig gi rnam par śes pa'i gnas gañ ze na | mig ni lhan cig 'byuñ ba'i gnas so || yid ni de ma thag pa'i gnas so || sa bon thams cad pa lus len par byed pa | rnam par smin pa¹⁾ bsdus pa kun gzi rnam par śes pa ni sa bon gyi gnas so || de yañ mdo bsdus na gnas rnam pa gñis su 'gyur ro ||²⁾ gzugs can dañ gzugs can ma yin pa'o || de la mig ni gzugs can no || de las gzan pa ni gzugs can ma yin pa'o ||

mig gañ ze na | gañ 'byuñ ba chen po bzi po dag rgyur byas pa mig gi rnam par śes pa'i rten po gzugs dañ ba ste | bstan du med la thogs pa dañ bcas pa'o || yid

gañ ze na | gañ mig gi rnam par śes pa'i sñon rol du 'das ma thag pa'i rnam par
 śes pa'o || sa bon thams cad pa'i rnam par śes pa gañ ze na | sñon gyi spros pa³⁾
 dga' ba⁴⁾ rgyur gyur pa la brten nas sa bon thams cad pa rnam par smin pa mñon
 par 'grub pa gañ yin pa'o || (D 2a4—b2, P 2b5—3a1)

1) pa D : par P 2) ro || D : te | P 3) | add. D 4) ba D : bar P

rūpa

Cf. 【七十五法】斎藤他 [2011]pp. 21—23; 【百法】斎藤他 [2014]pp. 195—198; 【パーリ文献】
 榎本他 [2014]pp. 26—29.

Pañcaviññānakāyasamprayuktā bhūmiḥ

【訳例】[日] いろかたち, 視覚対象 [英] form-and-color, visual object

【漢訳】色

【チベット語訳】gzugs

【定義的用例】

〔和訳〕

眼による認識の認識対象とは何か。指し示すことができ、抵触するいろかたちである。

また、それは多種であり、まとめると色彩と形状と〔身体的行為の〕表出とである。色彩とは何か。すなわち、青、黄、赤、白、影、日光、明り、暗闇、雲、煙、塵、霧、そして空（そら）も1つの色彩である。形状とは何か。すなわち、長、短、円形、球形、微細、粗大、整、歪、凸、凹である。〔身体的行為の〕表出とは何か。すなわち、取る、捨てる、〔関節を〕曲げる、伸ばす、立つ、座る、臥す、行く、帰る云々である。

また、色彩とは何か。いろかたちに見える、眼による認識の領域である。形状とは何か。いろかたちの集積であり、長さ等を判断する為のあり様である。〔身体的行為の〕表出とは何か。その同じ集積したいろかたちが生滅するとき、〔生滅という〕相反する原因によって、生じた場所に生じず、それ以外の場所に〔時間的には〕直後にであれ間においてであれ、〔空間的に〕近く、もしくは遠くに生じることが〔身体的行為の〕表出と呼ばれる。もしくは、その同じ場所に、変形したものが生じること〔が身体的行為の表出と呼ばれるの〕である。

そ〔の認識対象〕について、色彩、光、輝きが同義異語である。形状、集積、長、短云々が同義異語である。〔身体的行為の〕表出、行い、行為、振る舞い、行動、動きが同義異語である。色彩と形状と〔身体的行為の〕表出との全てに関して、眼の領域、眼の対象、眼による認識の領域、眼による認識の対象、眼による認識の認識対象、意識の領域、意識の対象、意識の認識対象が同義異語である。

また、その同じ〔いろかたち〕は、美しい色彩か、きたない色彩か、その両者の間にある、色彩のようなものかである。

〔原文〕

cakṣurviññānasyālabhanam katamat. yad rūpaṃ sanidarśanam sapratigham.

tat punar aneka-vidham, samāsato varṇaḥ saṃsthānam vijñaptiś ca. varṇaḥ katamaḥ. tadyathā nīlaṃ pītaṃ lohitaṃ avadātaṃ chāyātapa āloko 'ndhakāram abhram dhūmo rajo mahikā nabhaś cāpy ekavarṇam.¹⁾ saṃsthānam katamat. tadyathā dīrghaṃ hrasvaṃ vṛttaṃ parimaṇḍalam aṇu sthūlaṃ śātaṃ viśātaṃ unnatam avanatam. vijñaptiḥ katamā. tadyathādānam nikṣepaṇam samiñjitaṃ prasāraṇam²⁾ sthānam niṣadyā śāyābhikramaḥ pratikrama³⁾ ity evamādiḥ.

api khalu varṇaḥ katamaḥ. yo rūpa-nibhaś cakṣurvijñāna-gocaraḥ. samsthānaṃ katamat. yo rūpa-pracayo dīrghādi-paricchēdākāraḥ. vijñaptiḥ katamā. tasyāiva pracitasya rūpasyōtpanna-niruddhasya vairodhikena kāraṇena janma-deśe cānutpattis, tadanya-deśe ca nirantare vā⁴⁾ sântare vā, sannikṛṣṭe viprakṛṣṭe vōtpattir vijñaptir ity ucyate. tasminn eva vā deśe vikṛtōtpattiḥ.⁵⁾

tatra varṇa ābhāvabhāsa iti paryāyāḥ. samsthānaṃ pracayo dīrghaṃ hrasvam ity evamādayaḥ paryāyāḥ. vijñaptiḥ karma kriyā ceṣṭhā parispanḍa iti paryāyāḥ. sarvāsāṃ varṇa-samsthāna-vijñaptināṃ cakṣur-gocaraś cakṣur-viṣayaś cakṣurvijñāna-gocaraś cakṣurvijñāna-viṣayaś cakṣurvijñānālambanam manovijñāna-gocaro manovijñāna-viṣayo manovijñānālambanam iti paryāyāḥ.

punas tad eva suvarṇam vā durvarṇam vā tadubhayāntara-sthāyi vā varṇa-nibham. (YBh 4.12—5.11)

1) cāpy ekavarṇam Ms : caikavarṇam YBh 2) prasāraṇam Ms : om. YBh 3) pratikrama em. (ldog pa Tib. Cf. abhikramapratikrame ŚrBh 172.1f.) : atikrama Ms YBh 4) vā Ms : om. YBh 5) utpattir vijñaptir ity ucyate. tasminn eva vā deśe vikṛtōtpattiḥ Ms (Cf. YBh 5, footnote 3) : tasminn eva vā deśe 'vikṛtōtpattir vijñaptir ity ucyate YBh

[漢訳]

彼所縁者謂色有見有對。

此復多種。略說有三。謂顯色形色表色。顯色者謂青黃赤白光影明闇雲煙塵霧及空一顯色。形色者謂長短方圓麤細正不正高下色。表色者謂取捨屈伸行住坐臥如是等色。

又顯色者謂若色顯了眼識所行。形色者謂若色積集長短等分別相。表色者謂即此積集色生滅相續由變異因於先生處不復重生轉於異處或無間或有間或近或遠差別生。或即於此處變異生。是名表色。

又顯色者謂光明等差別。形色者謂長短等積集差別。表色者謂業用為依轉動差別。如是一切顯形表色是眼所行眼境界眼識所行眼識境界眼識所縁意識所行意識境界意識所縁名之差別。

又即此色復有三種。謂若好顯色若惡顯色若俱異顯色似色顯現。 (T 279b3—19)

[チベット語訳]

mig gi rnam par śes pa'i dmigs pa gañ ze na | **gzugs** gañ bstan du yod ciñ thogs pa dañ bcas pa'o ||

de yañ rnam pa du ma yod do ||¹⁾ mdor na kha dog dañ ²⁾ dbyibs dañ rnam par rig ³⁾ byed do || kha dog gañ ze na | 'di lta ste | sñon po dañ | ser po dañ | dmar po dañ | dkar po dañ ⁴⁾ grib ma dañ | ñi ma dañ | snañ ba dañ | mun pa dañ | sprin dañ | du ba dañ | rdul dañ | khug rna dañ | nam mkha' kha dog gcig pa'o || dbyibs gañ ze na | 'di lta ste | riñ po dañ | thuñ ñu dañ | lham pa dañ | zlum po dañ | rdul phra mo dañ | rags pa dañ | phyal le ba dañ | phyal le ba ma yin pa dañ | mthon po dañ | dma' ba'o || rnam par rig byed gañ ze na | 'di lta ste | len pa dañ ⁵⁾ 'jog pa dañ | bskum pa dañ | brkyañ ba dañ | 'greñ ba dañ | 'dug pa dañ | ñal ba dañ | 'gro ba dañ | ldog pa dañ | de la sogs pa'o ||⁶⁾

yañ kha dog gañ ze na | gañ gzugs dañ 'dra ba mig gi rnam par śes pa'i spyod yul du gyur pa'o || dbyibs gañ ze na | gañ gzugs rgyas par riñ po la sogs par yoñs su bcad⁷⁾ pa'i rnam pa'o || rnam par rig byed gañ ze na | rgyas pa'i gzugs skyes pa 'gags pa de ñid mi mthun pa'i rgyus skyes pa'i phyogs su mi 'byuñ ba dañ | de las g'zan pa'i phyogs su yañ | bar du ma chod pa'am | bar du chod pa dañ bcas

pa'am | ñe ba'am riñ bar 'byuñ ba dañ | phyogs de ñid du yañ mi 'gyur ba 'byuñ
ba ni rnam par rig byed ces bya'o ||⁸⁾

de la kha dog ni snañ ba dañ gsal ba dañ zes bya ba'i rnam grañs su gtogs pa'o
|| dbyibs ni rgyas pa dañ | riñ po dañ | thuñ ñu zes bya ba la sogs pa'i rnam grañs
su gtogs pa'o || rnam par rig byed ni las dañ byed pa dañ | spyod pa dañ | g-yo ba
dañ | yoñs su g-yo ba zes bya ba'i rnam grañs su gtogs pa'o || kha dog dañ dbyibs
dañ⁹⁾ rnam par rig byed thams cad kyañ mig gi spyod yul dañ | mig gi yul dañ
| mig gi rnam par ses pa'i spyod yul dañ | mig gi rnam par ses pa'i yul dañ | mig
gi rnam par ses pa'i dmigs pa dañ | yid kyi rnam par ses pa'i spyod yul dañ | yid
kyi rnam par ses pa'i yul dañ¹⁰⁾ yid kyi rnam par ses pa'i dmigs pa zes bya ba'i
rnam grañs su gtogs pa'o ||

yañ de ñid kha dog bzañ po dañ | kha dog ñan pa dañ | de gñi ga'i bar ma dor
gnas pa kha dog lta bu'o || (D 2b2—3a4, P 3a2—b3)

1) do || D : de | P 2) | add. P 3) par add. P 4) | P : || D 5) | D : om. P 6) || D : |
P 7) bcad D : gcad P 8) || D : om. P 9) | add. P 10) yid kyi rnam par ses pa'i yul
dañ | D : om. P

<略号および1次文献>

- add. added in
D チベット大蔵経 デルゲ版
em. emended
Ms Sanskrit Manuscript (Rāhula Sāṅkṛtyāyana により撮影されたフィルムのコピーがドイツのゲッティンゲン大学において保管されており、これを使用した。目録番号 Xc 14/28 に関しては Bandurski[1994: 64] 参照。)
om. omitted in
P チベット大蔵経 北京版
ŚrBh *Śrāvakabhūmi*
(Skt. ed.) 声聞地研究会 [1998]
T 大正新脩大蔵経
YBh *Yogācārabhūmi* (*Pañcaviññānakāyasaṃprayuktā bhūmiḥ*)
(Skt. ed.) Bhattacharya[1957: 3—10]
(Tib.) D (4035) tshi 1—5b2, P [109] (5536) dzi 1—6a7
(Chin.) T [30] (1579) 279a1—280b2

<参考文献>

Bandurski, Frank

[1994] “Übersicht über die Göttinger Sammlungen der von Rāhula Sāṅkṛtyāyana in Tibet aufgefundenen buddhistischen Sanskrit-Texte,” *Untersuchungen zur buddhistischen Literatur*,

Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Beiheft 5, Göttingen, Vandenhoeck und Ruprecht, S.9–126.

Bhattacharya, Vidhushekhara

[1957] *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga*, part 1, Calcutta, University of Calcutta.

榎本文雄 他

[2014] 『ブツダゴースの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—バウツダコーシャ III』インド学仏教学叢書 17、東京、山喜房佛書林。

斎藤明 他

[2011] 『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集—仏教用語の用例集（バウツダコーシャ）および現代基準訳語集 1—』インド学仏教学叢書 14、東京、山喜房佛書林。

[2014] 『瑜伽行派の五位百法—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—バウツダコーシャ II』インド学仏教学叢書 16、東京、山喜房佛書林。

声聞地研究会

[1998] 『瑜伽論 声聞地 第一瑜伽処—サンスクリット語テキストと和訳—』大正大学総合佛教研究所研究叢書 第4巻、東京、山喜房佛書林。

既刊紹介①

瑜伽行派の五位百法

—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—

パウッダコーシャ II (Bibliotheca Indologica et Buddhologica 16)

編著：斎藤明（代表）／一色大悟／高橋晃一／加藤弘二郎／堀内俊郎／石田尚敬／松田訓典

2014年2月20日

山喜房仏書林

「本書が対象にする「五位百法」は、この瑜伽行派が成立させた法（精神的・物質的要素）の体系である。説一切有部の「五位七十五法」を基礎にして、独自の視点からそれを批判的に発展させたといえるが、五位百法説は、思想的に唯心・唯識説へと傾斜していった瑜伽行派ならではのいくつかの特色をうかがわせる。

(中略)

本書では、ヴァスバンドゥ（世親/天親）に帰される『大乘百法明門論』（玄奘訳）が挙げる瑜伽行派の「百法」を対象とするが、同論はそれぞれの名目のみを提示している。このため、ヴァスバンドゥ作の『五蘊論』*Pañcaskandhaka*（大乘五蘊論）とともに、兄のアサンガによる『アビダルマ集論』*Abhidharmasamuccaya*（大乘阿毘達磨集論）が定義している、あるいは主要な用例を提供している箇所を示し、それぞれの用例を根拠に、基準となる現代語訳をそれぞれに提示した。

その上で、用例に関するそれぞれの注釈文とともに、先行するいくつかの欧文訳例を示した。さらにまた、『瑜伽師地論』および『顕揚聖教論』等にも関連する用例を、「その他の瑜伽行派文献」として挙げている。」

(同書「はじめに」より抜粋)

既刊紹介②

ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語
—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—

パウッタコーシャ III (Bibliotheca Indologica et Buddhologica 17)

編著：榎本文雄（代表）／河崎豊／名和隆乾／畑昌利／古川洋平

2014年3月31日

山喜房仏書林

「 伝統的な漢訳語の使用やチベット訳に従うことで隠れたままにされてきた、個々の仏教術語の孕む様々な問題点を鮮明に浮かび上がらせるために、他の研究者が検証できるように典拠を提示した上で基準訳語を提示することは有効な方法である。例えば、dharma (dhamma) を常に「法」と訳す態度は、多義を有するこの語を文脈に応じた的確に翻訳する努力を予め放棄し、問題に見て見ぬ振りをするに等しい。仏典の現代語訳の試みは、上述の如く、事態をより一層紛糾させる場合もあるが、まさにこの紛糾こそが、すなわち、一つ一つのことを根底から問い直す営為を不断に継続することが、真実をより深く解明するものであると考える。本書が、日本のインド仏教研究の新たな展開と活性化に向けた問題提起のための一里塚として資することを願っている。

同時に、人文学の社会的意義が問われることが多い昨今において、インド仏教研究者の最大の社会貢献は、できるだけ良質（正しくてわかりやすい）の現代語訳仏典を人々に提供することであり、その基盤構築の役割を本プロジェクトが担っているものと確信している。」

（同書「はじめに」(p.iii)より抜粋)

記事

H26 年度第一回研究会合

平成 26 年 7 月 25 日（金）15 時より、東京大学・山上会館・二階会議室（203）

1. 研究代表者・斉藤明教授より、昨年度の事業に関して、パウツダコーシャ II を公刊した旨の報告がなされた。
2. 研究代表者・斉藤明教授より、研究進捗状況に関する報告書を年度末に当該機関に提出した旨の報告がなされた。
3. 大阪大学・榎本文雄教授より、昨年度、研究成果としてパウツダコーシャ III を公刊した旨の報告がなされた。
4. 研究代表者・斉藤明教授より、中観諸文献における難解語「プラパンチャ」の解釈法に関する研究報告がなされた。
5. 今年度の活動として、11 月にシンポジウム開催を決定し、プラジュニャーに関する公開討論パネルを行うこととなった。

H26 年度第二回研究会合

平成 27 年 2 月 28 日（土）15 時

より、東京大学・山上会館・地下会議室（002）

1. 研究発表「有身見 (satkāya-dṛṣṭi) の語意をめぐって」と題して、研究代表者・斎藤明教授が研究発表を行った。
2. 研究代表者・斎藤教授より、公開シンポジウム (prajñā/ praññā) の総括がなされた
3. 斎藤研究班「瑜伽行派の五位百法」および、榎本研究班「ブツダゴースアの著作に至るパーリ文献の五位七十五対応語」の内容について、討論がなされた。
5. 次年度の研究計画について、斎藤明教授より全体の展望が説明されたのち、各研究班の計画が報告された。
6. ニューズレター第 4 号の発刊について、「研究ノート」の投稿依頼がなされた。

H27 年度第一回研究会合

2015 年 7 月 25 日（土）15 時より、東京大学・伊藤国際学術研究センター・中教室 1. 研究代表者（斎藤明、東京大学）より、当該科

研費による研究の総括と展望について、説明がなされた。

2. 日本印度学仏教学会第 66 回学術大会二日目（平成 27 年 9 月 20 日）でのパネル発表の打ち合わせをおこなった。パネル題名は「煩惱の根源をめぐって」とし、発表者は榎本文雄（大阪大学教授）、一色大悟（東京大学特任研究員）、渡辺章吾（東洋大学教授）斎藤明（東京大学教授）、高橋晃一（東京大学特任研究員）石田尚敬（愛知学院大学講師）の 6 名とすることを確認し、各自の発表内容を簡単に解説した。
3. 各班の研究報告と今年度の研究計画、次年度以降の対応について、室寺義仁（滋賀医科大学教授）、宮崎泉（京都大学准教授）、佐久間秀範（筑波大学教授）、山部能宜（早稲田大学教授）、菊谷竜太（東北大学特任研究員）より、現状の報告と今後の予定について、説明がなされた。

編集後記

大変お待たせいたしました。ニューズレター第 4 号をお届けいたします。今回は活動報告のほか、「研究ノート」として、今後刊行を予定している「定義的用例集」の見本を紹介しております。ご覧いただければ幸いです。今回より、装丁をあらためました。今後とも、活動内容の充実とニューズレターの質の向上を目指して努力してまいります。よろしくお願いいたします。

スタッフ

研究代表者

齋藤 明
(東京大学大学院人文社会系研究科・教授)
「総括+インド大乘仏教経論」

研究分担者

榎本 文雄
(大阪大学大学院文学研究科・教授)
「初期仏教関連用語」
室寺 義仁
(滋賀医科大学・教授)
「初期瑜伽行派関連用語」
佐久間秀範
(筑波大学大学院人文社会科学研究科・教授)
「瑜伽行唯識思想関連用語」
宮崎 泉
(京都大学大学院文学研究科・准教授)
「インド中観思想及びチベット仏教思想関連」
山部 能宣
(早稲田大学大学院文学研究科・教授)
「仏教論理学・認識論関連用語」
桜井 宗信
(東北大学大学院文学研究科・教授)
「インド密教関連用語」

連携研究者

石井 公成 (駒澤大学仏教学部・教授)
岩田 孝 (早稲田大学・名誉教授)
永ノ尾 信悟 (東京大学名誉教授)
桂 紹隆 (広島大学・名誉教授)
久間 泰賢 (三重大学人文学部・准教授)
下田 正弘 (東京大学大学院人文社会系研究科・教授)
末木 文美士 (東京大学名誉教授)
馬場 紀寿 (東京大学東洋文化研究所・准教授)
丸井 浩 (東京大学大学院人文社会系研究科・教授)
袁翰 顕量 (東京大学大学院人文社会系研究科・教授)
渡辺 章悟 (東洋大学文学部・教授)

研究協力者

Charles Muller
(東京大学大学院人文社会系研究科・特任教授)
Paul Harrison
(Stanford Univ. Professor)
Jonathan Silk (Leiden Univ. Professor)
ツルティム・ケサン (大谷大学名誉教授)
永崎 研宣 (人文情報学研究所・所長)
苦米地 等流 (人文情報学研究所・専任研究員)
叶 少勇 (北京大学・准教授)
何 歆歆 (浙江大学・教授)
高橋 晃一 (齋藤研究班)

加藤 弘二郎 (齋藤研究班)
堀内 俊郎 (齋藤研究班)
石田 尚敬 (齋藤研究班)
松田 訓典 (齋藤研究班)
一色 大悟 (齋藤研究班)
得能 公明 (齋藤研究班)
新作 慶明 (齋藤研究班)
鄭 祥教 (齋藤研究班)
崔 境眞 (齋藤研究班)
Thomas Newhall (齋藤研究班)
楊 潔 (齋藤研究班)
清水 尚史 (齋藤研究班)
河崎 豊 (榎本研究班)
畑 昌利 (榎本研究班)
名和 隆乾 (榎本研究班)
古川 洋平 (榎本研究班)
岡田 英作 (室寺研究班)
高務 祐輝 (室寺研究班)
横山 剛 (宮崎研究班)
三代 舞 (山部研究班)
真鍋 智裕 (山部研究班)
佐藤 晃 (山部研究班)
佐々木 亮 (山部研究班)
菊谷 竜太 (桜井研究班)

Bauddhakośa Newsletter 第4号 (2015年9月29日発行)

発行元: Bauddhakośa プロジェクト (The Creation of Bauddhakośa : A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences 【Grant-in-Aid for Scientific Research(S)】)

〒113-0033

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

インド哲学仏教学研究室内

E-mail: b_kosha@l.u-tokyo.ac.jp

印刷 株式会社 サンワ

Bauddhakośa プロジェクトの研究成果は、以下の URL よりご覧いただけます。

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.html